

# 元稹 「聞白樂天左降江州司馬」 詩の解釈をめぐって

—— 詩人の情の表現のされ方について ——

## 目次

はじめに

一、「聞白樂天左降江州司馬」 詩の概観

二、「聞白樂天左降江州司馬」 詩の解釈のされ方

① 「ものさびしい情景描写」を通してあらわされる詩人の思い

i 「残燈」について

ii 「暗風」「寒窓」について

iii、景物描写を通してあらわされる詩人の情について

② 「常識ではありえない動作」によってあらわされる詩人の思い

i、「垂死」について

ii、「驚」について

秋谷 幸治

iii、転句（垂死病中驚坐起）で用いられる「ギャップ」について

おわりに

はじめに

- |   |         |       |               |   |    |
|---|---------|-------|---------------|---|----|
| 1 | 残燈無焰影幢幢 | 残燈    | 焰無くして         | 影 | 幢幢 |
| 2 | 此夕聞君謫九江 | 此の夕べ  | 君の九江に謫せらるるを聞く |   |    |
| 3 | 垂死病中驚坐起 | 垂死の病中 | 驚いて坐起すれば      |   |    |
| 4 | 暗風吹雨入寒窓 | 暗風    | 雨を吹いて寒窓に入る    |   |    |

元稹「聞白樂天左降江州司馬」

中唐の詩人元稹に、「白樂天の江州司馬に左降せらるるを聞く」と題される、よく知られた詩がある。この詩は、元稹の詩集である『元氏長慶集』の他に、『唐詩選』『唐詩別裁集』など唐詩のアンソロジーにも収録されており、彼の代表作の一つとって良いものであろう。また、左遷された友人白居易を思いやる深い気持ちがあらわされた詩として、後世の人々から高い評価を受けてきた。元稹と白居易の友情の厚さを説明する際に、しばしばこの詩が取り上げられるのである。

ではこの詩において、友人を思いやる気持ちは、どのように表現されているのであろうか。あらためてこの詩を見

てみると、詩人の思いをあらわすことばは一つとして見出すことができない。起句から結句にかけて、友人の左遷の知らせを耳にしたときの情景が描写されているだけなのである。

では、この詩を読んで、友人を思いやる深い気持ちが表現されていると指摘する人たちは、いったいどこからそれを読みとつたのであろうか。彼らはそう指摘するだけで、その根拠を十分には示していない。しかし、多くの人たちによつてそのように評価されるからには、詩中には友人を思いやる深い気持ちが確かに表現されているのであろう。

そこで、本論では、具体的にどのようなところに詩人の思いが表現されているのかを検討したい。この詩は、一見するとありふれた詩のようである。しかし詩中で用いられることばを一つ一つ検討してみると、詩人の思いが効果的に表現されていると言い得る。以下このことについて述べたい。

#### 一、「聞白楽天左降江州司馬」詩の概観

まず、元稹「聞白楽天左降江州司馬」詩を概観しておきたい。この詩は、テキストによつていくつかの文字の異同が見られる。本論は、基本的に李攀龍『唐詩選』をテキストとして論を進めることとしたい<sup>(1)</sup>。なおこの詩の詩形は七言絶句、韻字は「幢」「江」「窓」で、『広韻』「上平三江韻」で韻を踏んでいる。

題名「白楽天の江州司馬に左降せらるるを聞く（聞白楽天左降江州司馬）」<sup>(2)</sup>では、この詩が詠まれた状況が示されている。この詩は、友人白楽天（白居易）の江州司馬左遷を耳にしたときのことを詠んだものだというのである。

白居易は、二十九歳で進士に及第し、藍屋尉、左拾遺を歴任し、中央のエリート官僚の道を順調に進んでいた。元和十年、当時の宰相である武元衡の暗殺事件が起こると、白居易はその事件に対して、ただちに上書した。これが越

権行為だと見なされ、江州司馬に左遷されてしまう。「司馬」は州の副知事とはいっても、左遷されたものが就く名目的な閑職であった。一方、元稹もこの時すでに通州の司馬に左遷されていた。つまり元稹は左遷され失意のどん底にあった中、さらに友人の左遷の知らせを耳にしたのである。

起句、承句「残燈 焰無くして 影 幢幢、此の夕べ 君の九江に謫せらるるを聞く」<sup>③</sup>は、詩人のもとに白居易の左遷の知らせが耳に入ってきた、その時の情景が描かれている。今にも消えそうなともしび（残燈）の影がゆらゆら（幢幢）とゆれている、そのような夜に白居易の左遷が耳に入ってきた、とここでは詠まれている。「九江」とは、題名の「江州」のこと。ここで「江州」と言わず「九江」と言っているのは、改めて言うまでもなく韻を踏むためである。

転句、結句「垂死の病中 驚いて坐起すれば、暗風 雨を吹いて寒窓に入る」<sup>④</sup>では、白居易の左遷の知らせを聞いた時の元稹の反応とその時の情景が描かれている。白居易の左遷の知らせを聞いたとき、元稹は病に倒れ今にも死にそうであった。左遷の知らせを聞くとガバツと身を起こしその場に座った。夜の黒々とした風が、雨を交えて寒々しい窓に吹き込んできていた。

この詩は全体を通して情景描写がなされていることが分かるだろう。友人の左遷の知らせを聞いたことに対する、詩人の思いをそのまま吐露したことは見当たらない。ここではひとまずそのことを確認しておきたい。

## 二、「聞白樂天左降江州司馬」詩の解釈のされ方

次に、この詩は、いままでどのように評価されてきたのかを見ていきたい。この詩のこれまでの評価を見てみると

次のように言える。それは、詩中に、友人の左遷に対する深い悲哀の情が表現されているということである。例えば『古唐詩合解』で王堯衢は、この詩を次のように評している。

此の詩を読めば、古人の友誼の厚きを嘆ず。…(中略)…「垂死」句、病にして死に垂んとするは、痛の至りなり。驚きて坐起するは、驚きの甚だしきなり。元、白二人は心知 至友にして、休戚は相ひ関し、其の情は此くの如し。

読此詩、嘆古人友誼之厚。…(中略)…「垂死」句、病而垂死、痛之至也。驚而坐起、驚之甚也。元、白二人心知至友、休戚相関、其情如此。

清・王堯衢『古唐詩合解』卷六

王堯衢は、この詩全体について「古人の友誼の厚きを嘆ず」と評している。そして、特に転句を解釈する中で、その「友誼の厚」さがどのように表現されているのかを論じている。

「病にして死に垂んとするは、痛の至りなり。驚きて坐起するは、驚の甚だしきなり」、病で「死に垂んとす」ることとは、詩人にとつてこの上なく悲痛な状態である。しかし友人の左遷の知らせを聞いた詩人は、その中においても「驚いて坐起」したのであり、これは驚きの極致だということである。そして、元稹と白居易の二人は、心の通い合っている(心知)、親友(至友)であり、喜びも悲しみ(休戚)も互いに分かち合う間からであることが、この転句の表現からわかる。そのように王堯衢は述べている。すなわち王堯衢は、特に転句の部分に「友誼の厚」さが、表現されているとしているのである。

また現代に出版された蕭滌非ほか『唐詩鑑賞辞典』<sup>5)</sup>でも、特に転句を引き合いに出して詩人の情の表現のされ方を論じている。

すでに「垂死の病中」と言っているのであれば、「驚いて坐起する」ことは、当然難しいことである。しかし、作者は驚いて「坐起」したのだ。ここには、次のようなことが、あらわされているのである。すなわち、その驚きようは実に大きく、針に刺されるのと同じようなものであったということである。そして、（元稹と白居易とは）喜び悲しみをもにするあいだからであって、相手が受けたことを、我が身のように考えていたということである。元稹と白居易の二人の友情の深さは、ここからはつきりと読みとれるのである。

既曰「垂死病中」、那麼、「坐起」自然是很困難的。然而、作者却驚得「坐起」了、這就表明、震驚之巨、無異針刺、休戚相關、感同身受。元、白二人友誼之深、于此清晰可見。

以上のように『唐詩鑑賞辞典』の中でも、特に転句をひきあいに出して、詩人の思いがどのように表現されているのかを論じている。すなわち「垂死病中」であつたにも関わらず、「驚坐起」したという転句の表現に元稹の白居易を思う気持ち、巧みにあらわれているということである。

\*

これらは、この詩のポイントを的確にとらえていると言えるだろう。だが、一つは、詩に対する簡単なコメントであり、もう一つは詩に対する鑑賞文という性格からか、必ずしも十分な論証がなされている訳ではない。特に、「今にも死にそうな病である（垂死病中）」と「驚いてガバツと起き上がった（驚坐起）」ということばのくみあわせが、唐詩の中においてどれほどに奇抜であるのか、十分に検討されていない。その点を明らかにすれば、この詩のおもしろさが、よりはつきり浮かび上がってくるのではないか。そのように考えられる。

さらにもう一つ言うと、転句にのみ、詩人の思いがあらわされているわけでもない。むしろ、起句や結句で描かれるものがなしい風景描写が、転句であらわされる詩人の思いをよりきわだたせていると考えられる。その点も、もの

がなしい風景をあらわすことばを詳細に検討して、明らかにする必要がある。

そこで次節では、まず第一に、起句や結句のものがなしい風景描写が、詩全体にどのような効果をもたらせているのかを論じたい。そして第二に「垂死」と「驚」、それぞれのことばのはたらきに注目して、詩人の思いが巧みに表現されているのかを明らかにしたい。

### ① 「ものさびしい情景描写」を通してあらわされる詩人の思い

#### i、「残燈」について

はじめに起句の「残燈」ということばから検討したい。「残燈」とは、「今にも消えそうなあかり」のことである。すなわち、「今にも消えそうなあかり（残燈）」がぼつんともっている、そのような、ものがなしい夜の情景を描くところから、この詩ははじまっている。このような情景描写は、詩そのものに、なにかしらはたらきをもたらしているものだと考えられる。そこで実際に、唐詩において「残燈」ということばがどのように用いられているのかを調査みると、詩人の「悲しみ」や「愁い」をあらわす際に、よく使われていることが分かる。そして、そのような詩人の思いを、ひきたてるはたらきをしていると言える。これは後に検討する結句の「暗風」「寒窓」も同様である。ここではそのことを確認していききたい。

元稹には、「残燈」の用例が四例ある。例えば次にあげる詩には、友人の妻の死にさいする情景描写として「残燈」が登場する。

- 1 燼火孤星滅、2 残燈寸焰明      燼火 孤星 滅し、残燈 寸焰 明らかなり  
 3 竹風吹面冷、4 簷雪墜階声      竹風 面を吹きて冷くこと冷ややかにして、簷雪 階に墜ちて声す  
 5 寡鶴連天叫、6 寒雛徹夜驚      寡鶴 天に連なりて叫び、寒雛 夜を徹して驚く  
 7 祇応張侍御、8 潛会我心情      祇だ応に張侍御のみ、潛かに我が心情を会すべし

元稹「独夜傷懷贈呈張侍御」張生近喪妻

この詩も、詩人の思いは直接的には描かれていない。しかし一句目、二句目で描かれている、「残り火（燼火）」「朝まで輝いていた星（孤星）」、「今にも消えそうなあかり（残燈）」、「微かなほのお（寸焰）」という室内の情景。さらには五句目、六句目に描かれている、「ひとりぼっちの鶴（寡鶴）」、「寒々しい雛（寒雛）」という屋外の情景。これらが、友人の妻の死を悲しむ詩人の思いをうきぼりにしている。

また、次にあげる白居易の新樂府「上陽白髮人」詩では、寵愛を失った女性が一人、秋の夜長を過ごす中で「今にも消えそうなあかり（残燈）」がともっている。

- 18 秋夜長、      秋夜長し、  
 19 夜長無寐天不明      夜長くして寐ぬる無く天明けず  
 20 耿耿残燈背壁影、      耿耿たる残燈 壁に背く影  
 21 蕭蕭暗雨打窓声      蕭蕭たる暗雨窓を打つ声

白居易「新樂府・上陽白髮人」

秋の夜長、眠ることができず、なかなか朝がやってこない。ここでは、そのような悩ましい夜に「今にも消えそうなあかり（残燈）」がともっている。「耿耿」とは、心がおだやかでない状態を言う。具体的には、寵愛を失った女性



が、秋の夜長に眠れず、悲しみにうちひしがれていることを言っているのであろう。そして「今にも消えそうなあかり（残燈）」という景物が、そのような悲しい思いをさらに引き立てる役割をしている。

以上のことから、「今にも消えそうなあかり（残燈）」がぼつんともっている、という詩の書き出しそのもの、すでに詩人の「悲しみ」や「愁い」があらわれていると言える。その「悲しみ」や「愁い」は具体的にどのようなものであるかは、もちろん明言できない。しかし、これから詩人に起こる悲劇を暗示させるものであることは確かである。

## ii 「暗風」「寒窓」について

次に結句の「暗風」「寒窓」であるが、「暗風」とは、「黒々とした夜の風」ということであり、「寒窓」とは、「寒々しい窓」ということである。これらは、詩人が左遷の知らせを耳にした後に目にする情景である。このような情景を描くことによつて、この詩はしめくくられている。この「暗風」「寒窓」ということばも、先の「残燈」と同じように、詩人の「悲しみ」や「愁い」をひきたてているが、ここでは唐詩における「暗風」と「寒窓」の用例を確認したい。

「暗風」の『全唐詩』における用例は、「聞白楽天左降江州司馬」詩以外には一例、また「風雨 暗し（暗風雨）」という用例が一例あるだけである。以下に、「暗風」と「風雨 暗し（暗風雨）」のそれぞれの用例を見ていくこととする。

「暗風」と「風雨 暗し（暗風雨）」のそれぞれの用例を見てみると、いづれもが詩人が苦境に立たされた場面が詠われているという点で共通している。盧仝「願公の雪中に寄せらるるに酬ゆ」詩では、詩人が貧しく病に臥せている

雪の中で「暗風」が吹いている。

- |           |          |                       |
|-----------|----------|-----------------------|
| 1 積雪三十日、  | 2 車馬路不通  | 積雪 三十日、車馬 路 通ぜず       |
| 3 貧病交親絶、  | 4 想憶唯願公  | 貧病にて交親 絶へ、想憶するは唯だ願公のみ |
| 5 春鳩報春帰、  | 6 苦寒生暗風  | 春鳩 春の帰するを報ずるも、苦寒 暗風生ず |
| 7 簷乳墮懸玉、  | 8 日脚浮軽紅  | 簷乳 墮ちて懸かる玉、日脚 浮軽たる紅   |
| 9 梅柳意却活、  | 10 園圃冰始融 | 梅柳の意 却って活き、園圃の冰 始めて融く |
| 11 更候四体好、 | 12 方可到寺中 | 更に四体好きを候ちて、方に寺中に到るべし  |

盧仝「酬願公雪中見寄」

「貧病にて交親 絶へ、想憶するは唯だ願公のみ。春鳩 春の帰するを報ずるも、苦寒 暗風生ず」貧しくかつ病に臥せていて友人との交遊が絶たれてしまっている今、ただ願公のことだけをしのんでいる。外は少しづつ春めいてきているが、自分は寒さに苦しんでおり、暗い風が吹いている。そのように詠われている。このように、ここでは貧しさ病に苦しんでいる状態の中で「暗風」が吹いている。

次にあげるのは陳子昂の「落第して西のかた還り 魏四幃に別る」詩である。この詩では題名から分かるように、科挙の試験に落第した詩人の失意の思いが描かれている。

- |          |         |                        |
|----------|---------|------------------------|
| 1 転蓬方不定、 | 2 落羽自驚弦 | 転蓬 方に定まらず、羽を落として自ら弦に驚く |
| 3 山水一為別、 | 4 歆娛復幾年 | 山水 一たび別れを為し、歆娛 復た幾年ぞ   |
| 5 離亭暗風雨、 | 6 征路入雲煙 | 離亭 風雨暗く、征路 雲煙に入る       |
| 7 還因北山逕、 | 8 帰守東陂田 | 還りて北山の逕に因り、帰りて東陂の田を守らん |

「**轉蓬** 方に定まらず、羽を落として自ら弦に驚く」風に吹かれる蓬は、いつもあちこちに飛ばされ、羽を落とした鳥は、弓のはじく音にびくびくしている、と詠われている。ここでいう「**轉蓬**」とは、官職を求めて、流浪する詩人自身のさまを比喩的にあらわし、また「**落羽**」とは、試験に落第して失意の底にいるようすをあらわしていると考えられる。そして、このように詩人が失意のどんぞこにあり、先行きが真つ暗ななかで「**離亭 風雨暗く、征路 雲煙に入る**」、離れて建つあずまやに黒々とした風雨が吹き、旅路にはもやがたちこめている、という情景が描写されている。これも詩人の心情を象徴的にあらわした情景描写だと言えよう。

以上の用例から分かるように、「**暗風**」もしくは「**風雨暗し**」ということばは、詩人が苦境に立たされている状態で用いられることが分かる。もちろん「**暗風**」「**風雨暗し**」は、そもそも用例自体がほとんどないので、これらが際だった共通点だとは断言できない。

しかし、次にあげる「**寒窓**」は、『**全唐詩**』の中で二十近くの用例を数えることができ、そのうちの約半分が、詩人の「**かなしみ**」を詠うさいに描かれている。したがってそこに際だった共通点を指摘することができる。

\*

まずはじめに、元稹詩の中で用いられる「**寒窓**」の用例を見ておきたい。元稹は「**聞白樂天左降江州司馬**」詩以外に「**寒窓**」ということばを、三度用いている。その中の一つ、「**西に帰る 絶句十二首**」では、雪の降る「**寒窓**」の中で、自身の老いを悲しんでいる。

1 **寒窓風雪擁深爐**、2 **彼此相傷指白鬚**      **寒窓の風雪 深爐を擁し、彼れ此れ相ひ傷み白鬚を指す**

3 **一夜思量十年事**、4 **幾人強健幾人無**      **一夜にて十年の事を思量す、幾人強健にして幾人無からんと**

## 元稹「西歸絶句十二首」

「寒窓の風雪 深爐を擁し、彼れ此れ相ひ傷み白鬚を指す」寒々しい窓に風や雪が吹きかかっている中、暖炉のそばにいる詩人は、自身の頭のあちこちに白いものが混じってきたのを悲しんでいる。そして「一夜にて十年の事を思量す、幾人強健にして幾人無からんと」この十年の間でいつたいどれだけの知人が死んでいったのか。そのようなことを考えている。このように自分の老いと死について考え、悲しんでいる場面の中で「寒窓」ということばが用いられていることが分かる。

さらに続いて、唐詩の中で用いられる「寒窓」の用例を広く見ていきたい。次にあげるのは中唐の詩人錢起の「冬夜 旅館に題す」詩である。ここでは、詩人が旅の途中、ある旅館に泊まったさいの自身の思いを述べている。

- |          |          |    |          |       |            |
|----------|----------|----|----------|-------|------------|
| 1 退飛憶林藪、 | 2 樂業羨黎庶  | 退飛 | 林藪を憶ひ、   | 樂業    | 黎庶を羨む      |
| 3 四海尽窮途、 | 4 一枝無宿処  | 四海 | 窮途に尽き、   | 一枝として | 宿る処無し      |
| 5 嚴冬北風急、 | 6 中夜哀鴻去  | 嚴冬 | 北風 急にして、 | 中夜    | 哀鴻 去る      |
| 7 孤燭思何深、 | 8 寒窓坐難曙  | 孤燭 | 思ひ何ぞ深く、  | 寒窓    | 坐して曙になり難きか |
| 9 勞歌待明發、 | 10 惆悵盈百慮 | 勞歌 | 明を待して發し、 | 惆悵    | 百慮に盈つ      |

## 錢起「冬夜題旅館」

一句目から六句目までは、寄る辺のない詩人が、不安な気持ちで旅を続けるようすを比喩的にあらわしていると言える。そして七、八句目の「孤燭 思ひ何ぞ深く、寒窓 坐して曙になり難きか」では、旅の途中で立ち寄った旅館で、ものさびしく夜明けがくるのを待つ、詩人の様子が詠われている。そのような中、九句目で、旅人を送る歌（勞歌）がどこからともなく聞こえて来る。これによつてますます詩人は「惆悵 百慮に盈つ」憂い悲しむのである。そのよ

うに考えると、この詩における「孤燭」「寒窓」「労歌」は、それぞれ詩人の憂いを引き立たせる役割を持っていると言えよう。

次にあげるのは、牟融「客中の作」である。この詩も詩人が故郷から遠く離れた地で、愁いを詠っている。

1 千里雲山恋旧遊、 千里の雲山 旧遊を恋ひ、

2 寒窓涼雨夜悠悠 寒窓の涼雨 夜 悠悠

3 浮亭花竹頻勞夢、 浮亭の花竹 頻に夢を勞し、

4 別路風煙半是愁 別路の風煙 半ば是れ愁ひなり

5 芳草傍人空对酒、 芳草の傍人 空しく酒に対し、

6 流年多病倦登樓 流年 多病にして樓に登るに倦む

7 一杯重向樽前醉、 一杯 重ねて樽前に向ひて酔ひ、

8 莫遣相思累白頭 相思をして白頭を累はしむる莫かれ

「千里の雲山 旧遊を恋ひ、寒窓の涼雨 夜 悠悠」はるか遠くにそびえる、雲のかかった山を眺めやると、むかし旧友と交遊したことを懐かしく思い出す。いま寒い窓にはさびしく雨が降っており、夜がしんと更けていく。そのように詠われている。

このような中で詩人は、いままでの旅の思いを次のように述べている。「別路の風煙 半ば是れ愁ひなり」すなわち、いままで友と別れて旅をしてきたが、そこで目にしてきたものは半分以上が愁いに感じるものであったと。つまりここでは、「寒窓」に雨が降る中で、旅の中での「愁い」を思い起こしている。

次の詩は施肩吾の「代征婦怨」詩である。ここでは、出征する軍人の妻の「怨」みが描かれている。

- |            |           |          |        |       |        |         |       |
|------------|-----------|----------|--------|-------|--------|---------|-------|
| 1 寒窓差見影相隨、 | 2 嫁得五陵輕薄兒 | 寒窓       | 差ぢて見る  | 影     | 相ひ隨ふを、 | 嫁ぎて得る五陵 | 輕薄の兒を |
| 3 長短艷歌君自解、 | 4 淺深更漏妾偏知 | 長短の艷歌    | 君自ら解し、 | 淺深    | 更に漏れ   | 妾       | 偏に知る  |
| 5 面裙多淚鴛鴦滅、 | 6 雲鬢慵梳玳瑁垂 | 面裙       | 淚多く    | 鴛鴦滅し、 | 雲鬢     | 梳るに慵く   | 玳瑁垂る  |
| 7 何事不看霜雪裏、 | 8 堅貞惟有古松枝 | 何事か霜雪の裏を | 看ざらんや、 | 堅貞    | 惟だ有り   | 古松の枝    |       |

施肩吾「代征婦怨」

この詩は全体として、浮気者の夫が他の女性と逢い引きしているのを、その妻が「寒窓」から目にし、悲しんでいる様子が詠われている。すなわち、ここでもかなしみを詠う場面の中で「寒窓」が用いられているのである。

以上のことから分かるように、「寒窓」ということばは、老いや死を「傷」んだり、不安な旅を続ける中で「惆悵」したり、いままでの旅路での「愁」いを思い起こしたり、他の女性と逢い引きをする夫を「怨」んだりする中で用いられている。つまり悲しみを詠う情景として「寒窓」は多く用いられるのである。

### iii、景物描写を通してあらわされる詩人の情について

前節では次のことを確認した。それは、起句で描かれていた、「今にも消えそうなあかり（残燈）」や結句で描かれていた、「黒々とした夜の風（暗風）」、「寒々しい窓（寒窓）」ということばは、唐詩の中において、「悲しみ」や「愁い」を詠うさいの情景として用いられることが多く、これらの感情をより引き立たせるかのようなはたらきをしている、ということである。

前に示した『唐詩鑑賞辞典』では、この「残燈」「暗風」「寒窓」ということばについて、次のように述べられている。

る。すなわち、これらのものがなしい風景描写には、詩人の哀しい思いが滲み込んでいるというのである。いささか長い引用になるが、以下にそれを示しておきたい。

元稹は、異郷へ左遷され、またその身は重い病気を患い、精神状態はもとよりよくなかった。今、突然、親友もまた、ぬれぎぬを着せられ左遷されたことを聞くと、心の中では、さらに非常な驚きや、強い怨みや、満ちあふれた憂いが、いつせいにうちからわき起こったのである。そしてこのような寂しい心で景物を見ているので、すべての景物も陰気で暗くなるのである。そこで、「灯」を見れば、炎が失われていく「残灯」に感じられ、灯の陰影でさえも、「幢幢」——暗くてゆらゆらと一定ではない様子——となっているのである。「風」はもともと暗い、明るいと言うことができないものである。しかし今は「暗風」となっている。「窓」は、もともと寒い熱いと言えないものである。しかし今はまた「寒窓」となっている。感情が移入され、照射され、滲み込んでいるからこそ、「風」「雨」「灯」「窓」ですら、「残」であり「暗」であり「寒」になるのである。「残燈無焰影幢幢」「暗風吹雨入寒窓」の二句は、景物についてのことばであるだけでなく、また感情についてのことばでもあるのだ。悲しい景物を用いて哀しい思いを描いており、思いと景物とが渾然一体となっていて、「絶妙に溶け合っていてその痕跡はわからない」のである。

元稹貶謫他郷，又身患重病，心境本来就不佳。現在忽然聽到摯友也蒙免被貶，內心更是極度震驚，万般怨苦，滿腹愁思一齊涌上心頭。以這種悲涼的心境觀景，一切景物也都變得陰沈昏暗了。于是，看到“灯”，覺得是失去光焰的“残灯”；連灯的陰影，也變成了“幢幢”——昏暗的搖曳不定的樣子。“風”，本來是無所謂明暗的，而今却成了“暗風”。“窓”，本來無所謂寒熱的，而今也成了“寒窓”。只因有了情的移入，情的照射，情的滲透，連風、雨、灯、窓都變得又“残”又“暗”又“寒”了。“残燈無焰影幢幢”“暗風吹雨入

寒窓”兩句，既是景語，又是情語，是以哀景抒哀情，情与景融會一体，“妙合無垠。”

『唐詩鑑賞辭典』賈文昭執筆

この指摘は、この節で検討してきたことを、うらづけるものである。情景描写によって、詩人の思いがあらわされることを、中国の古典詩学の中では、「意境」と言う<sup>⑥</sup>。すなわち「愁い」や「悲しみ」に満ちた思いで景物を描けば、その景物にも自ずから詩人の思いが滲み込むということである。そして、この詩では、「残燈」「暗風」「寒窓」というものがなし風景描写がそれに当たると言える<sup>⑦</sup>。

## ② 「常識ではありえない動作」によってあらわされる詩人の思い

前節では、起句や結句で描かれている、ものがなし情景描写に、詩人の「悲しみ」や「愁い」が暗示的にあらわされていることを指摘した。しかしこのような表現手法そのものは、中国の古典詩の中で古くから用いられてきたものであり、この詩特有の表現手法であるとは言えない。「残燈」「暗風」「寒窓」といったものがなし情景描写は、確かに詩人の「悲しみ」や「愁い」を引き立てる役割をしているが、この詩の中で「友人に対する深い思い」がより強調してあらわされているのは、転句であると言える。

そこで次に転句の「垂死」ということばと「驚」ということばに着目しながら、「友人に対する深い思い」がどのように表現されているかを検討したい。転句では今にも死にそうであるにも関わらず、驚いてすばやく起き上がったという「常識ではありえない動作」が描かれている。そしてそのような動作を描くことで、友人の左遷に対する悲しみを強調して表現していると考えられる。以下このことについて検討したい。



## i 「垂死」について

まず第一に「垂死」ということばについてである。「垂死」とは、「今にも死にそうな状態」「死が近い状態」をあらわすことばであり、普通は散文の中で用いられる表現である。

例えば『後漢書』列女伝には、董祀の妻である文姫が、夫の死罪を許してくれるよう、曹操に請う場面で「垂死」という表現が用いられている。

(董) 祀は屯田都尉と為るも、法を犯して死に当たる。文姫は曹操を詣でて之に請ふ。(…中略…) 文姫曰はく、「明公の厩馬は萬匹にして、虎士は林と成る。何ぞ疾足の一騎を惜しんで、垂死の命を濟はざらんや」操 其の言に感じて、乃ち追つて祀の罪を原す。

(董) 祀為屯田都尉、犯法当死、文姫詣曹操請之。(…中略…) 文姫曰、「明公厩馬萬匹、虎士成林、何惜疾足一騎、而不濟垂死之命乎」操感其言、乃追原祀罪。

『後漢書』列女伝・董祀妻

ここで董祀の妻である文姫は、次のように夫の命乞いをしている。「明公の厩馬は萬匹にして、虎士は林と成る。何ぞ疾足の一騎を惜しんで、垂死の命を濟はざらんや」。明公(曹操)さまのもとには、すぐれた馬も人士も、あり余るほどいらつしやいます。どうしてあしばやの馬を大切にするのに、夫の命を助けてくれないのですか、ということである。ここでは、君主から死罪を言い渡されて、死が近づいている董祀の命を「垂死の命」と表現している。

また次の『晋書』韓友伝には、鄧林の妻が病気で死にそうなところを韓友が方術を使って助けた下りが描かれている。

龍舒長 鄧林の婦は病ひ積年にして、死に垂とし、医巫は皆 意を息む。友 為に之を筮し、野豬を画作して臥する処の屏風の上に著はしめば、一宿にて佳を覚へ、是に於ひて遂に差ゆ。

龍舒長鄧林婦病積年、垂死、醫巫皆息意。友爲筮之、使画作野豬著臥処屏風上、一宿覺佳、於是遂差。

『晋書』韓友伝

長年病気をわずらつて、今にも死にそうな状態であつた鄧林の妻は、医者にも方術士にも見放されてしまつていた。けれども、韓友が占いをしたあと、猪の絵を描き、鄧林の妻が寝ている屏風の上のあたりにそれを掲げると、彼女の病気は立ちどころに快復したということである。ここでは鄧林の妻が病気で今にも死にそうな状態を「垂死」と表現している。

この二つの用例から、「垂死」というのは「今にも死にそうな状態」「死が近い状態」をあらわすことばであることが分かる。また、董祀の妻が必死になつて命乞ひしたことや、鄧林の妻が医者にも方術士にも見放されたことを基にして考えれば、「垂死」というのは、あと一歩で死にゆくという、かなりせつぱつまった危険な状態だということが見て取れる。

以上に述べたように、「垂死」ということばはふつう散文の中で用いられる表現である。一方詩歌の中となると、このことばは、全くと言っていいほど使われることがない。

例えば、『全唐詩』における「垂死」の用例は、元稹「白樂天の江州司馬に左降せらるるを聞く」詩以外には、杜甫の「鄭十八虔が台州の司戸に貶せらるるを送る。其の老に臨み賊に陥るの故に傷み、面別を為すことを闕く、情詩に見ゆ」詩の中の用例しか見いだせない。すなわち「垂死」ということばは、基本的に詩語と見なされていなかったのではないか。そのように判断される。

そこで、杜甫の詩において「垂死」はどのような用いられているのか、それを確かめておきたい。この詩においては、安祿山に偽官を授かったという罪によって、あやうく死罪になりかけた鄭虔に対する思いが描かれている。

1 鄭公樗散鬢成絲、 鄭公樗散鬢絲を成す

2 酒後常称老画師 酒後常に称す老画師と

3 萬里傷心嚴譴日、 萬里心を傷めしむ嚴譴の日、

4 百年垂死中興時 百年死に垂んとす中興の時

5 蒼惶已就長途往、 蒼惶已に長途に就いて往く、

6 邂逅無端出餞遲 邂逅端無く出餞すること遅し

7 便與先生応永訣、 便ち先生と応に永訣すべし、

8 九重泉路尽交期 九重の泉路に交期を尽さん

杜甫「送鄭十八虔貶台州司戸傷其臨老陷賊之故闕為面別情見於詩」

四句目をご覧いただきたい。「百年死に垂んとす中興の時」、安史の乱も治まり、平和な世の中になったのにも関わらず、鄭虔は賊軍に荷担したとの罪で、あわや死罪になりかけたと言われている。ここでは死罪を言い渡されて、すんでの所で助かった鄭虔について「死に垂んとす」と表現している。

この「垂死」ということばについて、吉川幸次郎氏は『杜甫詩注』<sup>⑩</sup>の中で次のように述べている。

人生の時間として意識されるのは「百年」。その終わりに近い所に鄭虔はいたとはいえ、それを尽くさないあいだに、「死に垂なん」として、死にかけた。崔器らの強硬論によれば、流刑どころか、あやうく一律の死罪に処せられるところであったのをいう。しかも世の中ぜんたいは国家「中興」の喜びにひたる時間においてである。

「垂死」という強烈で無遠慮な語、杜ここのみ用いる、他の詩人の用例の発見は、いつそう困難であろう。

このように吉川氏は、「垂死」ということばについて、「強烈で無遠慮な語で、他の詩人の用例の発見はいつそう困難であろう」と指摘している。先に確認したように「垂死」ということばは、現在残っている唐詩において、元稹「聞白樂天左降江州司馬」詩と、この杜甫詩の二例しか見いだせない。

また吉川氏は「垂死」ということばについて、「強烈で無遠慮」だと指摘している。先に確認したように、「垂死」ということばは、あと一步で死にゆくという、かなりせつぱつまった危険な状態をあらわすことばであった。氏によれば、そのようなことばを詩歌において用いるということは、あまりに直接的で大げさすぎるということなのである。

そもそも中国の古典詩では、古くは『詩経』の時代から、ことばのあやをふんだんに用いて、それとなく表現することを重視してきた。たとえば、「比」や「興」といった比喩手法がそれである<sup>①</sup>。「垂死」という直接的で大げさな表現が、そのような『詩経』以来の伝統から逸脱していることを、吉川氏は「強烈で無遠慮」と指摘しているのだと考えられる。

また考えてみれば、周知の通り、元稹や白居易の詩は、一読して、さつとわかるような平易な詩風であるとの評価を後世の人々から受ける一方で、軽薄で俗っぽいとの批判を受けることも多かった。例えば蘇軾が述べた「元稹白俗」という評語がそれである。一般的には詩歌には用いない「垂死」という、大げさなことばを詩の中に盛り込むところにも、後世の人々によって言われた軽薄さ、俗っぽさがあらわれていると考えられる。この点については、もちろん十分な検討が必要であるが、本論ではとりあえずこのように指摘するだけに止めたい。

## ii 「驚」について

次に「驚坐起」という表現について考えたい。前の節では、「垂死」が、直接的で大げさ表現であり、詩の中では一般的に用いられないことを確認した。このように、「垂死」という表現を詩の中で用いることだけでも特異なのであるが、転句ではその後にさらに「驚坐起」という表現が続いている。この「驚坐起」という表現は、常識で考えれば「垂死」とは絶対に結びつかないものである。そのように考えると、転句ではかなり特異な表現を用いていると言える。以下、そのことについて述べたい。

### 一

「驚坐起」の「驚」について見ていきたい。この詩を解釈する上での最も重要なポイントは「驚」字にあると筆者は考えている。以下、「驚」について検討していく。それでは、まず第一に「驚」の字義について確認しておきたい。後漢・許慎『説文解字』では「驚」について「馬の駭くなり（馬駭也）」と解釈している。すなわち「驚」は、「馬が衝撃を受けてハッとするさま」だということである。これが、「驚」の原義である。漢魏六朝時代の「驚」の訓詁には、さまざまあるが、基本的にはこの原義が派生したものだと思えることができる。例えば『楚辞』招魂の「宮廷震驚す」に対して後漢・王逸は「驚は駭なり」と注している。これは、先の『説文解字』とほぼ同じである。だが「驚」の動作の主体を馬と限定していない点が異なる。

また『文選』に所収される楊雄「羽獵賦」の「軍驚師駭」という表現について、李善注所引の宋衷『春秋緯』注では「驚は動なり」と説明している。これは、互文であり、「軍師（軍隊）」が「驚駭（移動する）」ということである。つまりここでは「驚」「駭」いずれもを「動く」という意味で捉えている。さらに、『広雅』釈言には「驚は、起なり」

としている。これら「動」「起」という動作は、いづれも「馬が衝撃を受けてハツとする」ということから、十分に連想できる動作である。これらも恐らくは『説文解字』の原義から派生したものと判断できる。

また伊藤東涯『操觚字訣』の中では、この「驚」字について次のように説明している。

驚ハ思ヒガケナキコトニオソルベキ事アルヲ、ハツト思ヒ、心ノシマル也。大小軽重緩急、人物、オドロク、オドロカス、通ジテイフ、駭ヨリハ、平ラカニシテナガシ、馬ハオドロキヤスキ物ユヘ、本ハ馬ノ駭ニ始マル字ナリ。

伊藤東涯によれば、「驚」は、もともとは馬の状態についてあらわすことばであつたが、それが派生して「ハツト思ヒ、心ノシマル」という人間の心理状態を指すことばになつたということである。この説明に従えば「驚」は何か「思ヒガケナキコト」や「オソルベキ事」に遭遇して、ハツとおどろくということである。

それでは実際に詩の中ではどのように用いられるのであろうか、それを確認しておきたい。例えば杜甫「魏六丈佑少府が交広に之くを送り奉る」詩には、詩人が魏佑という人物とばつたり蒼梧山の北で会つた様子が描かれている。

…中略…

13 遇我蒼梧陰、14 忽驚会面稀。 我に遇ふ蒼梧の陰、忽ち驚く会面 稀なるに

15 議論有餘地、16 公侯来未遲。 議論 餘地有り、公侯 来ること 未だ遅からず

…中略…

杜甫「奉送魏六丈佑少府之交広」  
ここでは、旧友である魏佑との思いがけない遭遇に、詩人は「驚」いたと表現されている。これは、言うまでもなく人間の心理状態について言っている「驚」であり、日本語の「ハツとおどろく」に相当する。

また次の白居易「重ねて滑上の旧居に到る」詩では、詩人が昔、住んでいた滑上におもむいた際のことを詠われている。

…中略…

7 插柳作高林、8 種桃成老樹

柳を挿したるは高林と作り、桃を種えたるは老樹と成る

9 因驚成人者、10 尽是旧童孺

因りて驚く成人なる者は、尽く是れ旧の童孺なるを

11 試問旧老人、12 半為繞村墓

試みに旧の老人を問へば、半ばは繞村の墓と為る

…中略…

白居易「重到滑上旧居」

ここで詩人は、以前住んでいた滑上におもむいた際、かつての子どもたちが皆大人になっており、老人達はすでに亡くなってしまうていことを「驚」いている。これも人間の心理状態について言っている「驚」である。

以上に確認した「驚」の例は、何か「思ヒガケナキコト」に遭遇してハツとし、おどろくという意味のものである。これらの「驚」は現代の日本語でいう「おどろき」と、意味的にはほとんど同じであると言える。そして元稹詩の転句「驚坐起」の「驚」もまた、友人白居易の左遷を聞いた後の詩人の反応ということをふまえれば、これは「思ヒガケナキコト」に遭遇した「おどろき」と解釈できよう。事実、日本においてはほとんどこのように解釈してきた。その点については論者に全く異論はない。

だが、次の節で詳しく述べるが「驚出」「驚飛」「驚起」のように、「驚」と動作をあらわすことばとが組み合わせられると、その動作は「急速な動き」で行われる。そうであるならば、「驚坐起」の「驚」をただ「おどろく」とだけ解釈するのでは不十分である。なぜなら「おどろく」と解釈するだけでは「急速な動き」が十分に表現されないからで

ある。

そのことについては、次の節で具体的な用例をあげて検討したい。しかし以上のことは常識的に考えれば、すぐに納得いくことだと思ふ。つまり「おどろいた」後に行われる動作はゆつたり、のんびりであることはまずあり得ない。それは普通は「急速」で「すばやく」なるはずである。また先に確認したように、「驚」のそもそもの原義は「馬が衝撃を受けてハツとする」であつたことを思い出したい。そしてこれらをふまえて解釈するならば、「驚坐起」は「おどろき、すばやく起き上がった」となる。本論では、詩人の深い情をはつきり読みとるために、「驚坐起」には「急速な動き」が伴っていることを、ことさらに強調したい。それでは以下、このことについて検討を加えたい。

## 二

先に述べたように「驚」に続く動作は「急速な動き」で行われると判断できる。まずはじめに、先秦の『韓非子』の用例を見てみたい。

衛人に弋を佐くる者有り。鳥至るに、因りて先ず其の捲を以て之をこま磨く。鳥驚きて射られざるなり。

衛人有佐弋者鳥至、因先以其捲磨之、鳥驚而不射也。

『韓非子』外儲説左上

この『韓非子』の用例は次のようなことを言っている。すなわち、衛の人が矢についた「捲（からめ縄）」で鳥をまねいてつかまえようとしたところ、鳥がおどろいて逃げてしまったので、射止めることができなかつたということである。ここでは「鳥驚而不射」と表現されているが、これは「鳥驚飛而不射」と考えて良いだろう。そしてこの「驚飛」という鳥の動作について考えてみると、ゆつくり、のんびりであるはずはない。衛の人が射止めることができなかつたというのであるから、それは「急速な動き」であつたはずである。



次に唐詩の用例を二つ示したい。まず李白「夢到天姥に遊ぶの吟、留別」詩である。この詩には、詩人が夢の中で、天姥山という仙山に遊んだ様子が描かれている。

…中略…

31 霓為衣兮風為馬、32 雲之君兮紛紛而來下 霓を衣と為し風を馬と為し、雲の君、紛紛として来たり下る

33 虎鼓瑟兮鸞迴車、34 仙之人兮列如麻 虎は瑟を鼓し鸞は車を迴らし、仙の人、列なること麻の如し

35 忽魂悸以魄動、36 怳驚起而長嗟 忽ち魂悸きて以て魄動き、怳として驚起して長嗟す

37 惟覺時之枕席、38 失向來之煙霞 惟だ覺めし時の枕席のみ、向來の煙霞を失う

…中略…

李白「夢遊天姥吟留別」

「忽ち魂悸きて以て魄動き、怳として驚起して長嗟す」ここで、詩人は仙山に遊ぶ夢からさめて、ハツとして（怳）、驚いて身を起こし、長く溜息をついたとある。そして「惟だ覺めし時の枕席のみ、向來の煙霞を失う」周りを見渡し、てみるとそこには寝具があるだけであり、今までの仙界の様子は影もかたちもないということである。つまり、詩人は今まで夢の中で気持ちよく仙山に遊んでいたけれども、それが突然、現実の世界に引き戻されてしまったのである。そのような文脈からすれば、「驚起」したという動作は、のんびりゆつくり起き上がったはずはない。これはハツとすばやく起き上がったということであろう。

次は白居易の「悟真寺に遊ぶ」詩である。ここでは、詩人が悟真寺に入った時、寺の中からコウモリがバツと飛び出てきた様子が「驚出」と表現されている。

17 一息幡竿下、18 再休石龕辺 一たび幡竿の下に息い、再び石龕の辺に休む

19 龕間長丈餘、20 門戸無扃

龕間長さ丈餘、門戸に扃無し

21 仰窺不見人、22 石髮垂若鬢

仰して窺えども人を見ず、石髮垂れて鬢の若し

23 驚出白蝙蝠、24 双飛如雪翻

驚き出づ白蝙蝠、双び飛んで雪の如く翻る

白居易「遊悟真寺」

「仰して窺えども人を見ず、石髮垂れて鬢の若し。驚き出づ白蝙蝠、双び飛んで雪の如く翻る」詩人が寺の中をうかがつて見ると、それにびつくりしたコウモリが中から飛び出てきたとある。そのような場面をふまえて考えれば、ここでの「驚出」というコウモリの動作も、ゆつくり、のんびり飛んでいるというはずはない。急速にバツと飛び出てきたというふうには解釈しなくてはいけないだろう。

\*

以上の用例から、「驚」に続く動作は急速ですばやいことが分かる。また向島成美氏は、『漢詩のことば』「漢魏六朝詩の『驚』について」<sup>12</sup>の中において「驚」と表現されるものには、その共通の特徴として「急速な動き」があることを指摘している。

…風、波、雷、さらには鳥の場合も含めて、「驚」と表現されるものには、共通した性格が見受けられる。それは、いわば急速な動きがあるということである。そしてその急速な動きが「おどろく」ことを連想させるから「驚」が用いられたのではなからうか。

氏は、「驚風」「驚波」「驚雷」というような、「驚」が名詞を形容する用例をあげて、以上のような見解を示している。氏のこの指摘は当を得ている。先に「驚飛」「驚起」「驚出」のように「驚」が動詞と組み合わせられている用例について検討したが、これらについても氏の指摘が同様に当てはまる。

さらにこれらのことをふまえて「驚坐起」を解釈するならば、「おどろいてすばやく起き上がった」とすることができる。すなわち「驚」は「おどろく」という心理状態をあらわすだけでなく、「急速な動き」も伴っているということである。そして、このように解釈すれば、詩人元稹の白居易に対する思いがより深刻なものとして読みとれる。その点については次の節で詳しく述べたい。

### iii、転句（垂死病中驚坐起）で用いられる〈ギャップ〉について

次に、いままでの検討に基づいて、元稹「白楽天の江州司馬に左降せらるるを聞く」詩の転句（垂死病中驚坐起）を捉えていきたい。先ほど確認した「垂死」と「驚」の詩語のはたらきを十分にふまえて転句を考えると、その表現の特異さが明らかになってくる。

まず第一に、「垂死病中」についてである。「垂死」とは、今にも死にそうだという、かなりせつぱつまつた危険な状態をあらわすことばであった。そして、このような直截で大きなことばは、詩の中では、ほとんど用いられないことは先に確認した。

そして第二に、「驚坐起」とは、友人の左遷の知らせを聞いて、おどろきすばやく身を起こしたということであった。「驚」というのは先に述べた通り、「おどろく」と同時に「動作のすばやさ」をあらわすことばであった。

これらの二つの表現を組み合わせて転句を解釈していくと、そこには大きな〈ギャップ〉があることに気付く。つまり、常識的に考えるならば、今にも死にそうな危険な状態にいる人間が、「すばやく」身を起こすことは、ありえない。ここには、読み手に目を引かせる、特異な表現が用いられていると判断できよう。そして転句で用いられるこ

の（ギャップ）に、今までの評者が指摘してきた、友人に対する深い悲哀の情が表現されているものだと考えられる。換言すれば、友人白居易の左遷の知らせは、元稹にとって見れば今にも死にそうな状態であっても、すばやく身を起すほどシヨッキングな出来事であったということである。そして、ここに友人に対する深い思いが表現されているということであろう。

先述したように、今までの通釈書では「驚」を一律に「おどろいて」と訳してきた。それは確かにその通りである。しかしここには「動作のすばやさ」もあらわされていることを忘れてはいけぬ。このことについて従来の通釈書では十分には指摘されてこなかった。本論では詩中における深い友情をはっきりと読みとるために「驚坐起」には「すばやく動作」が伴っていることをことさらに強調したい。つまり「驚坐起」を「すばやく起き上がった」と捉えることで、「垂死」との（ギャップ）がより強くなり、詩人の友人を思う気持ちがいよいよ強調されるのである。

ここで、この詩の評価のされ方をもう一度確認したい。この詩の評価のされ方は、大きく二つに分かれる。一つは、詩中には詩人の深い悲しみが表現されているとして、褒め称えているものである。そしてもう一つは、この詩を大げさとして批判的に捉えているものである。

例えば南宋の洪邁は『容齋隨筆』「長歌之哀」の中で次のように述べている。

嬉笑の怒は、皆を裂くよりも甚だしく、長歌の哀は、慟哭に過ぐ。此の語は誠に然り。微之江陵に在り、病中に樂天の江州に左降せらるるを聞きて、絶句を作り云ふ、「残燈 焰無くして 影 幢幢、此の夕べ君の九江に謫せらるるを聞く、垂死の病中 驚いて坐起すれば、暗風 雨を吹いて寒窓に入る」と。樂天、以為へらく「此の句は他人すら尚ほ聞くべからず、況んや僕の心をや」と。

嬉笑之怒、甚于裂帛、長歌之哀、過于慟哭、此語誠然。微之在江陵、病中聞樂天左降江州、作絶句云、「残

燈無焰影憧憧、此夕聞君謫九江。垂死病中驚坐起、暗風吹雨入寒窓。」樂天以為「此句他人尚不可聞、況僕心哉」

「嬉笑の怒は、皆を裂くよりも甚だしく、長歌の哀は、慟哭に過ぐ」笑いのうちに含まれる怒りは、まなじりをかつと開いて怒るよりも激しいものであり、詩歌によって表現される悲しみは、大声で泣くよりも深いのだと述べている。そして洪邁は、そのような例として、元稹の詩をひきあいに出している。つまり、洪邁によれば、詩中には、大声で悲しみ泣くよりも、深い悲しみが表現されているということである。これは、この詩を肯定的に捉えている例である。しかし、もう一方でこの詩を大げさで不自然だとして、否定的に捉えている人たちもいる。例えば、清・沈徳潜は『説詩粹語』の中で次のように述べている。

詩に又た苦語を過作して失する者有り。元稹の「垂死の病中 驚いて坐起すれば、暗風 雨を吹いて船窓に入る」は、情は摯ならざるに非ざれども、蹙蹶の声を成す。李白の「楊花落ち尽くし子規啼く」は、正に此の如き説を須ひず。

(詩) 又有過作苦語而失者、元稹之「垂死病中驚坐起、暗風吹雨入船窓」、情非不摯、成蹙蹶声矣。李白「楊花落尽子規啼」、正不須如此説。

清・沈徳潜 『説詩粹語』

「詩に又た苦語を過作して失する者有り」すなわち、詩には、あまりに悲痛すぎることをばを使ったことにより、失敗してしまうことがあると述べている。その例として「白樂天の江州司馬に左降せらるるを聞く」詩の転句と結句をひきあいに出している。そしてそれらに対して「情は摯まことならざるに非ざれども、蹙蹶の声を成す」詩中で表現されている詩人の思いは、真実であるけれども、それは不自然さ(蹙蹶の声)を感じると述べている。

また森槐南『唐詩選評釈』<sup>13</sup>も、この沈徳潜の指摘を受けて次のように述べている。

断じて自然に肺腑より流露し出し来たるものに非ず。善読のものは毫厘分寸の間に於て、其の性情の真偽を鑑別する決して難からざるを信ず。

このように述べ、この詩はやはり不自然だと指摘している。さらに森槐南は、詩についてよく知っているものならば、詩中に表現されている詩人の思いが本物であるかどうか、簡単に見分けることが出来るとまで言っている。森槐南のこの詩に対する評価は、かなりきびしいと言える。

これらは評価は異なるが、それぞれ、先ほど確認した転句の表現に対する言説だとみなすことができるだろう。すなわち、「今にも死にそうである（垂死）」にも関わらず「おどろいてすばやく起き上がった（驚坐起）」という常識ではあり得ない転句の表現に対して、一方では詩人の深い悲しみがあらわれていると褒めたたえており、もう一方では、それを大げさで不自然だと批判しているのである。評価そのものは異なるが、この転句の表現は読み手の目を引く、かなり特異な表現であったことをここでは示している。

#### おわりに

元稹「白楽天の江州司馬に左降せらるるを聞く」詩は、一見すると、どこにでもあるような、ありふれた詩のようである。だが詩中のことばを一つ一つ検討してみると、この詩には、詩人の思いが実に巧みに表現されていた。すなわち、「今にも死にそうである（垂死）」であるにも関わらず、「驚いてすばやく起き上がった（驚坐起）」という、常識ではありえない動作を描くことにより、詩人の思いを強調しているということである。「驚」を「おどろく」と

同時に「急速な動き」と捉えることで、現実との（ギャップ）がより強くなり、詩人の思いがより深刻なものとして読みとれるのである。このような表現技法は、「元軽白俗」といわれる白居易、元稹の詩に共通して見られるものであるのか。それについては縞を改めて考えたいと思う。

古くから高く評価され、多くの人々に知られている詩でも、その詩のおもしろさや巧みさはどこにあるのか、実は十分に検討されていない場合が多い。この詩は、特にその典型と言えるのではないだろうか。また一見するとありふれたことば、ありふれた表現のように見えても、その当時の詩文においては、必ずしも一般的ではないことも多い。詩中で用いられることば表現を、その当時の文脈に置いてみることで、その詩の持つ奇抜さ、新しさがより明らかになると考える。

(1) 元稹「聞白樂天左降江州司馬」詩が収録されている詩集をあげると次のようになる。『全唐詩』『唐詩選』『元氏長慶集』『唐詩別裁集』

(2) 『全唐詩』『元氏長慶集』では、題名を「聞白樂天授江州司馬」に作っている。先に述べたように本論は『唐詩選』本に基づいて論を進めていきたい。

(3) 『元氏長慶集』では、「憧憧」を「憧憧」に作っている。いづれに作っても、灯りがゆらゆらとゆれるさまをあらわすことばとして捉えられる。

(4) 『元氏長慶集』では「驚坐起」を「仍悵望」に作る。しかし、馬元調によつて校訂された『元氏長慶集』には、「驚坐起」に作ると注記されている。さらに洪邁は『容齋隨筆』の中において、「仍悵望」では意味が通じないとし、自らは「驚坐起」として

この詩を引用している。「驚」は本論の検討と中心になる部分なので、この文字の異同については慎重に取り扱わないといけない。だが以上に述べたように、この詩を収める詩集やこの詩を引用する文章は、ほとんど「驚坐起」としており、一般的にはこれで流布されていたと判断される。そのことを踏まえて、「驚坐起」として本論ではこの詩を論じていきたい。

(5) 蕭滌非ほか『唐詩鑑賞辞典』〔賈文昭執筆〕（上海辞書出版社 1983）

(6) 袁行霈著・佐竹保子訳『詩の芸術性とは何か』（汲古選書293）では、「意境」を次の三つのタイプに分類している。

① 思いが景物に触発されて生ずるあり方 ② 思いが景物に移入するあり方 ③ 思いが景物の思いに寄り添うあり方  
「意境」については、いろいろな説があり、もちろん簡単に判断できないが、この袁行霈氏の分類に基づいて考えるならば「残燈」「暗風」「寒窓」は②に分類できるであろう。

(7) 王昌齡『詩格』の「詩有三思」「詩有三境」や、皎然『詩式』の「取境」などに「意境」についての言説が見られる。

(8) 例えば正史の中で用いられる「垂死」の用例数をあげると次のようになる。『後漢書』二例、『晋書』十例、『宋書』三例、『南齊書』一例、『梁書』一例、『魏書』三例、『南史』一例、『北史』六例。このように見ると、正史の中における「垂死」の用例数そのものは、必ずしも多いとは言えない。だが唐代の詩のほとんどを収めた『全唐詩』の用例が全体で二例しかないのに比べれば、「垂死」ということばは、どちらかと言えば正史など、散文の中で用いられることが多いと判断される。

(9) また、「今にも死にそうな状態」をあらわすことばとしては、「垂死」のほかに「将死」「欲死」という表現もある。「垂死」に比べると、これらの方が用例数が多い。全唐詩の中では「将死」の用例は十一例、「欲死」の用例は十五例である。だが、『全唐詩』全体でこれだけの用例数しかないのであるから、これらのことばも、詩中で頻繁に用いられる詩語とは言えないと判断できる。

(10) 吉川幸次郎『杜甫詩注』（筑摩書房 1983）



(11) 「毛詩大序」では詩の六義として、「風」「雅」「頌」「賦」「比」「興」が掲げられている。その中の「比」と「興」について鄭玄は「比とは、物に比方するなり、興とは事を物に託するなり」と注をつけている。

(12) 向島成美『漢詩のことば』（あじあブックス 大修館書店 1998）

(13) 森槐南『唐詩選評釈』（東京文会堂 1918）